様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月４日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：22652074
研究課題名（和文）　19 世紀後半のベルギー王国における地理学と芸術の関係性

研究課題名（英文）　Excavating the relationships between geography and art in late nineteenth-century Belgium

研究代表者
島津　俊之（SHIMAZU TOSHIYUKI）
和歌山大学・教育学部・教授
研究者番号：60216075

研究成果の概要（和文）：19 世紀後半のベルギー王国では，以前のハプスブルク家領南部ネーデルラントに散在していた重要な文化的諸事象を「国家化」し，国民国家統合のシンボルとして祭り上げてゆく動きが生じた。地理学と芸術は，さまざまな関係性を取り結びつつ，この動きに巻き込まれていった。南部ネーデルラントの歴史的建築物や美しい景観，そしてメルカトルやオルテリウスといった 16 世紀の地理学者は，いずれも美術というメディアに媒介されつつ，ある種の「国家的遺産」として表象され，消費されていった。

研究成果の概要（英文）：In late nineteenth-century Belgium, important cultural phenomena scattered over the former Habsburg Southern Netherlands were ‘nationalized’ and enshrined as symbols of nation-state integration. Geography and art, in various relations to each other, were also involved in this process. Historic architecture and scenic landscapes in the Southern Netherlands, as well as sixteenth-century geographers such as Gerardus Mercator and Abraham Ortelius, were all represented and consumed as a sort of ‘national heritage’ through the medium of fine arts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	0	1,300,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,900,000	180,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：地理学史・芸術・ベルギー王国・モニュメント・記憶・挿絵・画家・地理書

１．研究開始当初の背景

地理学者はこれまで，様々な観点から芸術にアプローチしてきた。バンゼやヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは，地理的描写における芸術的感性の方法論的意義を主張した。芸術は地理学の研究対象としても一定の地位を得ており，絵画や写真等の造形芸術にみられる空間表象の政治性を論じる研究や，音楽や演劇等の表現芸術の空間性を問う研究，芸術産業の空間的集積等に注目する研究等がみられる。従来の地理学史研究はバンゼらの見

解に注目しつつも，科学性の担保という点で概して否定的な評価を与えてきた。一方，地理学史研究の領野自体を，アカデミズムの閉域から社会一般に広げる動きが国際的なトレンドとなって久しい。わたしは近年，この広義の地理学史研究に取り組み，近代国民国家形成期の日本とベルギーにおいて研究を進めてきた。その結果，19 世紀後半のベルギーでは，地理学を近代実用科学の代表とみなす思想と，国民統合に向けたナショナル・ヒーローを創造する実践が偶有的に接合し，例えばメルカトルやオルテリウスが芸術的彫像として視覚化されるなど，地理学と芸術の多様な接合が観察されることがわかってきた。ここにわたしは，近代国民国家形成期のベルギーをフィールドとして，地理学と芸術の関係性に新たな光を当てるという研究着想を抱くに至ったのである。

本研究は，ベルギー王国における国家官庁や民間の地理的実践と芸術との関係性を解明しようとするものであり，地理学史研究の領野をアカデミズムから社会一般に拡大する国際的なトレンドに沿うものである。予想される結果として，地理学を近代実用科学の代表とみなす思想と，国民国家建設に向けた種々の芸術的・地理的実践が時として偶有的に接合し，様々な芸術作品や場所・景観が生産されたこと，それらはしばしば生産者の意図を超えて，同時代や後世の人々によって多様に消費されていったことが解明されると考えられる。これらの結果は，国際的にみても，地理学史研究の新たな地平を切り拓くものであると信ずる。

２．研究の目的

地理学と芸術は，時空間の表象に関わる思想・実践を内包する点で共通性をもつ。バンゼは地理的描写における芸術的感性の重要性を説いたが，両者の関わりは近代アカデミック地理学の狭い言説世界に留まらない。ルネサンス期以降のヨーロッパ社会において，地理学は時に近代科学の象徴とされ，フェルメールの絵画《地理学者》のように，それ自体芸術表現の対象にもなった。やがて地理学と芸術は，共に近代国民国家に不可欠の技芸として社会的に関係づけられてゆく。本研究では，こうしたプロセスが明瞭に観察される 19 世紀後半のベルギー王国をフィールドとして，地理学と芸術の関係性がいかに構想され，それらがどのように実践されていったのか，その結果いかなる景観や場所が生産され，それらがどのように消費されていったのかを明らかにする。

より具体的な事例に即して説明すれば，19 世紀後半のベルギー王国では，広義の地理学と芸術が多様な形で関係づけられていた。アントウェルペンでの最初の国際地理学会議は王立芸術アカデミーと王立劇場を主会場とし，生誕地のルペルモンデにメルカトルの銅像が建立された。ブリュッセルのアカデミー宮殿の内部にはメルカトルの石像が据えられ，外壁にはアウギュスト・ロダンの石像《地理学者キューピッド》が屹立する。プチ・サブロン公園にはメルカトルとオルテリウスの石像が並んでいる。19 世紀後半のフェルメールの「再発見」は，同時代の画家アンリ・ド・ブラーケレールやレオン・ブルーニンに影響を与え，《地理学者》を主題とする絵画が生み出された。20 世紀初頭に美術教材として流通した風景画のセットは，ベルギー諸地域の心象地理の構築と普及に大きな役割を果した。本研究では，これらの多様な具体例の検討を通じて，地理学と芸術の関係性がいかなる思想的・物質的条件の下でどのように構想され，それらがいかに実践されていったのか，その結果いかなる場所や景観が生産され，それらがどのように消費されていったのかを明らかにしようとする。

３．研究の方法

2010 年度は，研究枠組みの練り上げと，地理思想・地理的実践と芸術との偶有的接合についての具体例の検討を行った。web 検索やオンライン洋古書通販サイトを通じて入手した資料に基づく研究枠組みの検討と具体例の予察的検討を行った後，国内での資料収集と，9 月のベルギーでの資料収集の成果を踏まえ，国内で補足的な資料収集を行いつつ，具体例の分析を進めた。2011 年度は，地理学と芸術の偶有的接合に伴う空間や場所の生産および消費に関する具体例の検討を行った。web 等での資料探索を継続し，8 月に国内で資料収集を行った後，9 月にベルギーで資料収集を行った。10 月以降は，国内での補足的な資料収集を行いつつ，具体的な分析を進めて研究結果を取りまとめた。

４．研究成果

2010 年度は，主に既存の文献資料や WEB 上のリソース，現地でのフィールドワークで収集した史資料に基づき，19 世紀ベルギー王国における広義の地理学と芸術との関係性について考察し，地理学者や地理学の可視的メ

ディアとしての芸術の意義の解明を試みた。『和歌山地理』に論文１編（査読有）を発表し，19 世紀後期の地理書の執筆・編集や挿絵の製作に携わった人々が広義の《芸術》というジャンルに属していたことを論じた。また，関連するテーマについて IGU 地域会議（イスラエル）における地理学史コミッションの集会で発表した。未公表の成果としては，フェルメールを「再発見」したとされるトレ＝ビュルガーが 1866 年に Gazette des Beaux-Arts に公表した論文“Van der Meer de Delft”のなかに，フェルメールの《地理学者》の複製版画（エティエンヌ・ボクール描画／レオン＝ルイ・シャポン線刻）が掲載されたことが判った。19 世紀の仏語圏に《地理学者》の図像を広めたメディアの一つを突き止めたことになる。フェルメールのみならず，地図や地球儀（天球儀）と人物を配した構図の絵画は，ルネサンス期ネーデルラントの人文主義者エラスムスの『愚神礼讃』(1515 年版）の挿絵以来の伝統を有し，17 世紀ネーデルラントでも同様の絵画がいくつか確認される。フェルメールと同時代を生きたレンブラントも，《ファウスト》と称される，《地理学者》と似た構図の版画を 1652 年頃に製作していた。ベルギー王国では，1913 年にルイ・テヴネが《地図を指差す男》という絵画を描いたことも新たに判明した。アンリ・ド・ブラーケレールの《地理学者》(1871 年）に始まるこの国のかかる図像表現は，フェルメールの「再発見」のみならず，エラスムス以来のネーデルラント絵画の伝統の延長上にも位置付ける必要がある。

2011 年度は前年度に続き，19 世紀後半のベルギー王国における地理学と芸術の関係性を，国民国家アイデンティティの確立や植民地主義の進展，及びそれらと複雑に関係しつつ勃興する地域主義というコンテクストのもとで探究した。絵画や彫刻といった造形芸術は，地理思想と地理的実践の融合体としての広義の地理学や，その担い手としての地理学者を，ある種の普遍的価値を有するものとして社会に効果的に伝達するメディアとしての役割を果たしうる。それらはまた，時として現実の空間や場所のなかに現われるのみならず，空間や場所それ自体の生産にも大きな役割を果たしうる。君主制国民国家の建設途上にあった 19 世紀後半のベルギー王国では，メルカトルやオルテリウスといった地理学史を飾る人物群や，近代科学の一象徴としての地理学それ自体を国家的あるいは地域的に領有する動きが顕在化するなかで，とくに屋内外に建立された彫像群がかかるメディアとしての役割を演じ，また空間や場所の生産の立役者ともなった。本年度の成果として特筆されるのは，1871 年のアントウェルペンにおける最初の国際地理学会議開催に事後的に接合される形で，生誕地域たるワースランドの地域主義のもとで建立された二つのメルカトル銅像である。ワースランドの中心都市たるシントニクラースの彫刻家ファン・ハバマートの製作した銅像が，同じくシントニクラースで活動した医師にして地域史家たるファン・ラムドンクの主導によって，生誕地ルペルモンデの教会前の広場に 1870 年に建立され，レプリカがシントニクラースの市庁舎に置かれた。ファン・ラムドンクは政府に働きかけ，同じ彫刻家に，ブリュッセルのアカデミー宮殿の内部に据えられることになる，メルカトルの石像をも製作させた。地域主義の色合いを帯びて製作された一体の銅像が，やがて国家主義や植民地主義の色合いを帯びた国際地理学会議と偶有的に接合されつつ増殖し，偉人とその実践の国家的領有のシンボルとなってゆく。その過程で，石像が据えられた空間や場所が，地域主義から国家主義，果ては植民地主義を表象するものとして捉えられつつ，またそうした解釈への対抗的言説も生産されうる。なお，地理学と芸術の関係性について考察した関連論文１編（査読無）を『空間・社会・地理思想』に発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①島津俊之「地理学者としての高島北海」空間・社会・地理思想，査読無，15，2012，51-75.

②島津俊之「『挿絵でみるベルギー』と「ボタニックの丘からの眺め」―19 世紀後半の地理書と挿絵をめぐる学史的考察―」和歌山地理，査読有，29，2010，6-42.

〔学会発表〕（計１件）

① Shimazu Toshiyuki, ‘Encountering a Geographical Modernity: Shibusawa Eiichi’s Visit to the Établissement Géographique de Bruxelles, 1867,’ International Geographical Union Regional Conference (Pre-conference sessions of the IGU Commission on the History of Geography), July 11, 2010, Tel-Hai Academic College, Kfar Giladi,

Israel.

６．研究組織

(1)研究代表者

島津　俊之 (SHIMAZU TOSHIYUKI)
和歌山大学・教育学部・教授
研究者番号：60216075

(2)研究分担者　なし

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者　なし

(　　)

研究者番号：